

懐良親王負傷で鬼神と化す！ 武光の奮戦で北朝軍は 総退却へ



筑後川の戦い 其之式

九州を二分する北朝勢と南朝勢の衝突となった筑後川の戦い。武光は、南朝勢を率いた征西將軍の懐良親王を支え、多くの犠牲を払いながらも戦いを勝利へと導きました。

北朝軍の反撃を受けながらも南朝軍勝利で終結

緒戦では、武光の機転で少武軍に大勝した菊池勢。その後、少武忠資(ただすけ)などが残った兵を集めて反撃に出たものの、返り討ちにしました。

しかし、数で勝る北朝軍は、少武頼尚を中心に必死で形勢を整え、反撃の機会をうかがっていました。この時の北朝軍の態勢は「魚鱗の構え(魚のうろこのように幾段にも構えること)」といわれるものでした。

これを見た南朝軍を率いる懐良親王は、武光率いる菊池勢と一つになり、頼尚の本陣へと突入を図りました。しかし、敵に取り囲まれた親王が重傷を負ってしまいました。一時は自刃も覚悟した親王でしたが、駆け付けた味方に救い出

され、千光寺近くの谷山城に退却しました。

味方の損害の多さに加え、親王の負傷を知った武光。しかし、北朝勢に勝利するにはこの一戦に賭ける以外にないと、決死の覚悟で敵陣に切り込みました。

壮絶な戦いの中で、敵將の一人、少武武藤(たけふじ)の首を取った武光は、その首を剣先に立てて、さらに敵陣深くに突入。それに浮足立った北朝勢は、総退却を始めました。武光・武政の軍勢は追撃の手を緩めず、宝満山に追い詰めた時、頼尚軍はわずか24騎でした。

しかし、ここで武光は、味方の損害の大きさや兵の疲労を考慮して追撃を中止。ここに、筑後川の戦いが終結しました。



筑後川の戦いの激しさが伝わってくる「大原合戦図屏風」(甲斐青萍画/小郡市教育委員会蔵)

正平塔

この一帯を支配し、南朝に尽くした調衆(しらべしゅう)一門の一つ星野氏が、筑後川の戦いで散った両軍の兵を供養するために建立したとされる塔です。



福童の將軍藤

懐良親王が傷の回復に感謝し奉納したとされる藤

筑後川の戦いで深手を負った南朝軍の総大将・懐良親王は、大中臣(おおなかとみ)神社で傷の回復を祈願しました。その後、無事快方に向かったことに感謝し、親王が奉納したと伝えられている藤の大木。1970年には、福岡県の天然記念物に指定されました。広さ500㎡の藤棚は圧巻で、毎年5月には「藤まつり」が開かれます。



大刀洗公園(菊池武光銅像)

武光の刀で川の水が真っ赤に染まった伝説の地

筑後川の戦いで少武頼尚に勝利した武光は、さらに敗走する敵を追って山隈原まで進出。さらに追撃しようとしたが、味方の損害も大きくここに軍を留めました。その時、武光が戦いで血まみれになった刀を小川で洗い、川の水が真っ赤に染まったことから、この一帯を「大刀洗」と呼ぶように。銅像は、その故事にちなみ1937年に建立されました。



善風塚跡

敵味方を超えて死者を弔うために立てた塚

両軍ともに多数の死傷者を出した筑後川の戦い。のちに南朝・北朝が敵味方の枠を超えて死者を供養するために、善風寺という寺院を立てたと伝えられています。その際に、特に身分の高かった武將7人を祀ったといわれるのが善風塚です。現在、塚はなくなっていますが、大原小学校の隅にある木々が当時の面影を残しています。

